

9 19 世紀の中東と西欧

(1) オスマン帝国の衰退と西欧の進出

図 9-1 1812 年におけるオスマン帝国の領域



図 9-1 をみてみよう。19 世紀のはじめ、日本では江戸末期（明治維新の 50 年ほど前）に、トルコのイスタンブールを都とする**オスマン帝国**が地中海を囲む領域の 3 分の 2 を領有していた。アラブ人の居住する地域の多くを支配領域に組み入れ、バルカン半島やギリシャなどヨーロッパ内陸まで入り込み、領土的には大帝国であった。

図 9-2 1912 年におけるオスマン帝国の領域



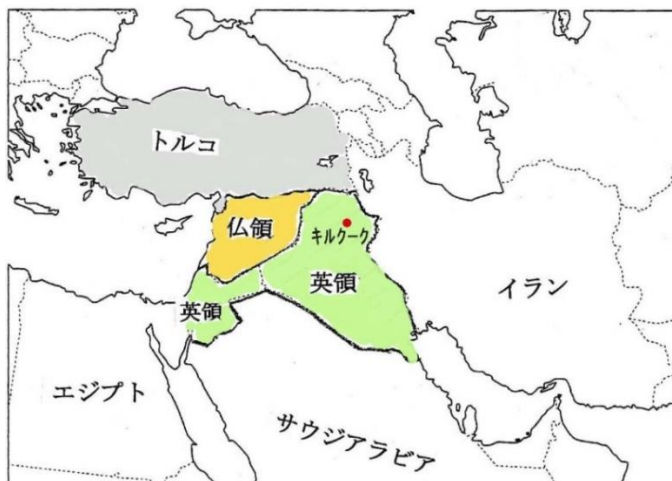
しかし、19世紀半ば以降になると、英・仏・独・露・オーストリアが領土の拡大を図って進出し、オスマン帝国の領域は次第に侵食されていった。

19世紀半ばに、オスマン帝国の支配領域にあった**ギリシャ**や**バルカン半島**では民族独立の動きが活発化し、西欧列強はこの動きに乗じてオスマン帝国に介入した。様々な民族が居住しているバルカン半島では、南スラブ系のセルビア人が2度にわたって蜂起してこれにロシアが支援、一方でオーストリアはバルカンへの進出をねらっていた。

エジプトや**アラブ地域**でもオスマン帝国からの離脱の動きが高まった。しかしこの地域に利害をもつ列強によってほとんどの地域が植民地や保護国になった。エジプトについては後で詳しく述べるが、マグリブではアルジェリアやチュニジアがフランスに軍事占領されて植民地化が進み、モロッコも不平等条約を結ばれ借金まみれでフランスの保護国となった。

このように西欧列強はその国力を高め、一方オスマン帝国は脆弱化して領土を侵食されていった。そして、第一次世界大戦後の1918年に、敗戦国となったオスマン帝国は最終的に解体・処分された。

図9-3 第一次世界大戦後の東アラブ



現在のイラク、ヨルダン、パレスチナは英領、シリア、レバノン は仏領になる。
キルクーク（イラク領）は油田の利権を英仏で分けることを条件に英領となった。

オスマン帝国が最後まで領域としていた**東アラブ**（イラク、シリア、パレスチナ）は英・仏によって分割されて委任統治領（植民地）とされた。また**アナトリア半島**（現在のトルコの領域）はギリシャなどの国々に分割処分されたが、その後起こったトルコ人による独立戦争で国土が回復、1923年のローザンヌ条約で新生トルコの領土として国際的に認められた。図9-3は第一次世界大戦後のオスマン帝国の領土の最終的な分割を示したものである。

(2) 西欧の工業化と中東の非工業化

西欧諸国と中東の諸地域は 19 世紀になぜこのように国力に差が開いたのか。西欧ではすでに 17 世紀に資本主義社会としての発展が始まったのに対して、中東は専制国家として社会の近代化が進まなかったのであり、19 世紀は西欧でおこった産業革命が中東に及ぶことがなかった。

西欧諸国は 17 世紀に封建社会から資本主義社会に徐々に移行した。大航海時代を経てアジアやアメリカ大陸で植民地を獲得し、商業活動と略奪によって資本（資金）を蓄積して資本主義発展の原資とした。日本との関係でいえば、オランダとの交易と石見銀山の銀はヨーロッパにおける資本主義の発展に大きく関係している。一時期、石見銀山の銀は世界の銀生産の 3 分の 1 を占め、ヨーロッパの商品経済の発展に大いに貢献した。

18 世紀には、商業だけでなく工業化によって産業を中心とした資本主義が発展していく。これを大きく進めたのが**産業革命**である。産業革命は 1770 年頃にイギリスではじまり 1830 年頃まで続くが、その後は仏・独・米・ロに波及し、産業資本の世界的な発展につながっていった。

産業革命について詳しく説明することはしないが、下に要点を記した。

産業革命についてのポイント

- ・ 産業革命は、最初にイギリスで起こり（1770～1830 年）、後に仏、独、米、ロシアに波及していく。
- ・ 手工業から**機械工業**への転換
それまでの木製の道具に代り、鉄製の精密な機械がつくられるようになる。
（機械製の織機や機関車など）
- ・ 機械を動かす動力の転換（人力、畜力 ⇒ **水力、蒸気機関**）
- ・ **工場制工業**の発展：工場で労働者が分業で生産するシステムが一般化する。

⇒⇒ 機械の発明と工場制工業の生産システムによって、**大量生産方式が確立**

天然繊維のなかで最も着心地がよいのは**綿織物**であろう。18 世紀の西欧では、人々はこの着心地のよい綿の魅力にとりつかれた。この綿織物の衣装の流行を「ファッション革命」と呼ぶ人もいる。当時、綿製品の生産地はインドや中東であり、西欧諸国は手織りの綿織物を輸入していた。

イギリスで起こった産業革命は綿工業ではじまった。機械による紡績機（糸の生産）と布

を織る織機が発明され改良が重ねられた。技術革新によって良質の織物が大量作られるようになった。大量生産されると必然的に価格も下がり、中東やインドの手織りの綿布と競争できるようになった。安い製品を大量に作ることで、輸入品に代わり国内の需要を満たすようになり、さらに 1830 年頃になるとイギリスの綿製品は国外に市場を求めて輸出されるようになった。市場を拡大することでイギリスの綿工業はさらに発展した。

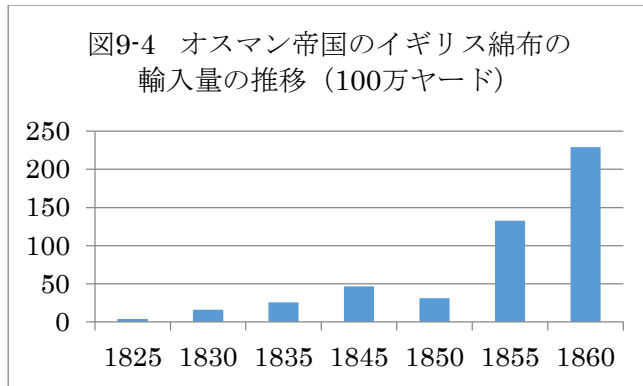
一方、中東やアジアの多くの国は、海外貿易に門戸を開いていなかった。日本は鎖国をし、他の国も貿易を厳しく規制していた。このため、工業製品の市場を世界に求め産業資本の発展を目指していた西欧諸国は、軍事的な圧力で門戸をこじ開けようとした。これが日本の場合は黒船の来航であった。

イラン：トルコマンチャーイ条約（1828 年）ロシアとの戦争で敗北による。ロシアの治外法権とロシアに有利な関税協定
 オスマン帝国：イギリスと通商条約締結（1838 年）
 関税自主権を失い、治外法権を認める
 エジプト：オスマン帝国とイギリスの通商条約を適用（1840 年）
 中国：南京条約（1842 年）アヘン戦争の敗北により締結させられる。
 香港割譲、5 港の開港、治外法権、関税自主権の喪失
 タイ：ボウリング条約で開国（1855 年）
 関税自主権を失い、治外法権を認める
 日本：日米修好通商条約（1858 年）
 神奈川、兵庫、などの開港、関税自主権を否定、治外法権

西欧諸国が中東やアジアの国々と通商条約を結ぶのは 1930 年頃からの 30 年間である。これは綿製品の大量生産により市場の拡大が必要とされた時代である。すでに軍事力の差は大きく、中東やアジアの国々は、治外法権を認め関税自主権を奪われるという不平等な通商条約を半ば暴力的に強要された。政治経済的な弱者が強者を保護する片務的規定であり、自由貿易を原則とした西欧列強にとって極めて有利な内容であった。それゆえ不平等条約と呼ばれている。

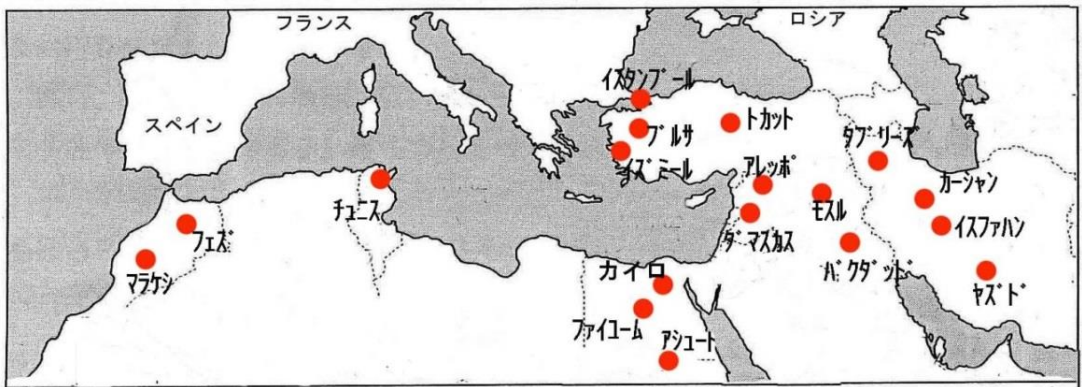
この結果、関税自主権を失った中東・アジアの市場に、機械制工業によって大量生産された綿製品が大量に流れ込み、イギリス製の綿製品が中東を席卷した。オスマン帝国のアナトリア地方で消費された綿製品のうち西欧からの輸入は 1820 年代にはわずか 4 %であった。

しかし1840年代はじめには27%、1870年代には70%を超えるまでに増えていった。イランでは1870年代に都市からかなり離れた農村の婦人もイギリス製の綿布で作った衣装を着るようになっていた。



輸入綿布が中東の市場を席巻したことで、地場の綿工業は壊滅的な打撃を受けた。19世紀初めまで中東には織物の特産地が各地に存在し、そこで作られた製品はヨーロッパにも広く輸出されていた。しかし不平等条約の締結後は機械制工業による製品との競争に敗れ、中東の綿工業は衰退していく。

図9-5 中東の伝統的な手工業都市



イスタンブールのウシュクダル地区の手織り織機は、1821年に600あったが、19世紀半ば過ぎには21に大幅減少した。またイランの織物の産地であったイсфаハンの手織り綿布は、価格が2分の1ないし3分の1のイギリス綿製品の流入で衰退し、1880年頃には職人数が5分の1に減少した。

伝統的な手工業が衰退した後、中東からの輸出はおもに農産物になった。工業化した西欧の需要に応じて食料としての穀物と、西欧の綿工業の原料である綿花などである。ここに工業国としての西欧諸国と農業国としての中東の国際的な分業の構造が生まれることになった。

図 9-6 エジプトの輸出に占める綿花の割合

1885 - 89 年	81%
1895 - 99 年	83%
1905 - 09 年	91%

19世紀末になると、西欧からの輸出品として綿製品に加えて鉄等の重工業品が増えた。中東へは鉄道の機関車や線路、通信機器などが輸出された。鉄道や電信は利権を得て資本進出した西欧の企業によって敷設・管理された。西欧列強は勢力圏の確保を目指して植民地獲得の争奪戦を行うようになり、中東諸地域は植民地・半植民地として政治的また経済的に西欧列強に従属していく。この時代は**帝国主義の時代**と呼ばれている。

(3) 近代化を急いだエジプトの債務問題とイギリスの保護国化

近代化と工業化

日本では黒船の来航が日本社会に大きな衝撃を与え、日本が欧米列強にいかにも遅れているかを知らされた。また、外圧は日本人に嫌がおうでも日本という国を意識させ、日本人に国民意識を覚醒させることになった。

開国を選択し 1867 年に明治維新を迎えてから、西欧に遅れた日本は急ぎ近代化すべく、鉄道の敷設、教育制度の整備、工業化、軍事組織の再編整備などの政策が急ピッチで進めた。福沢諭吉の「脱亜入欧」が示すように、ヨーロッパ近代に近づくことが明治政府の目指すところであった。

エジプトで「黒船」の役割を果たしたのは 18 世紀末の「ナポレオンのエジプト遠征」であった。ナポレオンはヨーロッパの近代とフランス革命の空気をエジプトに運んできた。当時のエジプトは専制国家であったオスマン帝国の属領だったが、エジプト人の民族意識が高まり、1805 年に総督になったムハンマド・アリは、事実上独立したエジプトの統治者として、

エジプトの近代化を進め、制度改革、工業化、インフラ整備を矢継ぎ早に行い、富国強兵を推進した。

ムハンマド・アリがおこなった政策は概略次のようである。

- ・エジプトの各地に勢力を振っていた封建勢力を排除し**中央集権化**を進めた。
- ・ナイル川の**水利開発**を行い農地の開発をおこなった。
- ・徴税制度の改革や専売制度によって**国家の財政収入を増**やした。
- ・そして、増大した財政収入を基礎に**インフラを整え、軍備を拡張し、近代的な工業の振興**をはかった。このため留学生を海外に派遣し、お雇い外国人を招き先進技術を導入した。

ムハンマド・アリによるこうした近代化と工業化の政策によってエジプトは発展した。しかし工業化政策は成功したとはいえず、19世紀半ばに大きな挫折を味わうことになる。

工業化の挫折は、西欧の機械制工業と比べて動力と技術の面で遅れていたことが要因の一つとして挙げられる。動力としての石炭がなかったため木材や畜力を使うこともありこれがうまくいかなかった。また技術面での不熟練も問題であったらしい。しかし工業化を開始して間もないエジプトにとって挫折の最大の要因は 1840年の西欧諸国との不平等条約の締結であった。これにより中東やアジアの他の地域と同様に、エジプトも関税自主権を失い外国人のエジプト国内での自由な商業活動を認めたことで、西欧から大量生産システムで作られた安い工業製品が流入、国内の工業は競争に敗れて短期間に衰退することになった。

日本も幕末の日米修好通商条約で関税自主権を失った。しかし日本の場合、繊維工業を中心に工業化が進み、明治末には産業革命によって重工業化へと進むことができた。

エジプトと日本の違いはどこにあるのだろうか。日本の場合、江戸時代に機能的な官僚制など社会のシステムの近代化がすでにできていたし、教育水準も高かった。また輸入された機械を国内で改良して日本に適した機械に作り変える職人の技があったことも大きい。西欧に負けない機械が作られたことである。

しかし、日本が西欧から遠かったという地理的要因も見逃せない。エジプトは地中海を挟んで西欧の隣にあり身近なターゲットになったが、日本は西欧からするとはるかに遠い極東にあり、また中国に対するほどには日本は関心をもたれなかった。

債務の拡大と保護国化

1840年の不平等条約締結後、エジプトは農業国の道を歩むことになる。綿工業が発展した西欧諸国の綿花需要に応じ綿花生産地の拡大発展がはかられた。

綿花生産のためには年間を通して灌漑用水が供給される必要があり、灌漑用水路やダム（堰）の建設・整備が進められた。また綿花生産地から綿花を輸出港であるアレキサンドリアに運ぶための鉄道も敷設され、製糖工場も作られた。

1860年代にはアメリカの南北戦争の影響で綿花の価格が大幅に上昇した。アメリカ南部の奴隷労働によって生産された綿花に依存していたイギリスの綿工業で綿花不足が深刻化したためである。このため、もうかる産業としてエジプトでは綿作地が拡大し、1870年代には綿花が総輸出の8割ほどを占めるまでになった。

図 9-7 綿花輸出の推移

年度	輸出量 (50000kg)	輸出額 (1000 エ・ポンド)
1849	258	515
1853	471	955
1857	491	1, 227
1863	1, 287	9, 356
1867	1, 253	6, 642
1871	2, 109	6, 243
1875	2, 632	9, 837

一方、1863年にエジプトの統治者になったイスマーイールは、「エジプトをヨーロッパにする」ことを夢見て欧化政策を採り、鉄道や港湾の建設、灌漑用水路の建設、電信・製糖工場・学校・道路の建設などの事業を進めた。

この政策が問題であったのは、財政収入の範囲を大きく超える支出を行い、資金を外債に依存したことである。開発のための費用の不足分を外国からの借金で調達したのだ。エジプトではすでに1856年にフランスと共同でスエズ運河の建設がはじまり、総工費の7割以上をエジプトが負担し、国外で債券を発行して資金を調達しフランスの金融機関から借入れをしていた。スエズ運河建設とインフラ建設などの諸事業がエジプトの借金を膨らませることになった。

一方、1865年に南北戦争が終わりしばらくすると綿花の価格は下落した。当然エジプトの綿花輸出による収入も減少した。このため債務の返済が滞った。借入れの利子は年10～14%ときわめて高く、利払いのためにまた新たな借金をするという形で負債を積み上げていった。

図 9-8 1862-73 年のエジプトによる外国債の発行 (1000E ポンド)

	額面	実質利子	借入れの目的
1862	3, 293	10. 00	借入金の返済
1864	5, 704	12. 70	借入金の返済
1865	3, 387	12. 60	ダイラ (領地) 買収
1866	3, 000	26. 90	鉄道建設
1867	2, 080	15. 10	領地買収
1868	11, 890	13. 24	借入金の返済
1870	7, 142	13. 24	砂糖生産工場の建設
1873	30, 000	12. 60	借入金の返済

1860 年までにスエズ運河建設のためなどで借入金がある
借金の目的は、借入金の返済、スエズ運河建設、戦争の戦費
担保は、穀倉地帯の諸県の収入、国家歳入

借金の担保として、地方の歳入 (穀倉地帯の税収)、さらに国家の歳入があてられ、1873, 74 年には利子の支払いだけで政府の財政収入の 46. 6% を占めた。

そして 1875 年には返済資金を調達するためにスエズ運河会社におけるエジプト政府の持株をイギリス政府に売却せざるを得なくなり、1876 年には実質的な債務不履行、つまり借金が返せなくなり、国家財政は破綻した。

この結果、エジプトの財政は債権国であるイギリスとフランスによって管理され、財政収入の大部分が債務返済にあてられることになった。外債の返済のために農民からの徴税が強行され、重税によって農村は疲弊し土地を手放す農民が増加、大地主層に土地が集積された。

イギリスにとってエジプトは大きな利益をもたらすおいしい国だったといつてよいだろう。イギリスの綿工業のために原料を供給地してくれるとともに工業製品 (綿製品、鉄製品など) のよい市場であり、さらにイギリス国内で過剰になった資金の運用先となり非常に高い収益が保障された。

また鉄道建設などのインフラ建設による利益も大きい。機関車などの輸出先にもなり投資による利益が得られたのである。

そしてエジプトの債務が膨れ上がり返済不能状態になると、大変な犠牲を払って得たスエ

ズ運河の権利を取り上げ、挙句の果てに国の財政収入すべてを管理してエジプト国民から徹底的に絞り上げ、最終的にはエジプトの主権を奪って保護国化（植民地）した。

現在は対外的な借金が膨らんでも国際的な救済システムがあり植民地になることはないが、19 世紀から 20 世紀にかけて借金が返せなくなれば財政を管理されて実質的に主権を奪われた。

日本はエジプト同様に欧米に倣って近代化を進めた。この資金を得るために農民に重税を課し、この額は江戸時代よりも重かったとも言われている。しかし多額の外債を発行し返済できずに列強に支配されるということにはなかった。日本より半世紀はやく近代化政策を進めてイギリスの植民地になったエジプトは日本の近代においてまさに反面教師であったといっている。

(4) オリエンタリズム 西欧人の東方世界のイメージ

考古学や歴史学でいうオリエントは、古くはオリエント文明という呼び名に象徴されるように、西アジアやエジプトの優れた古代文明を指した。

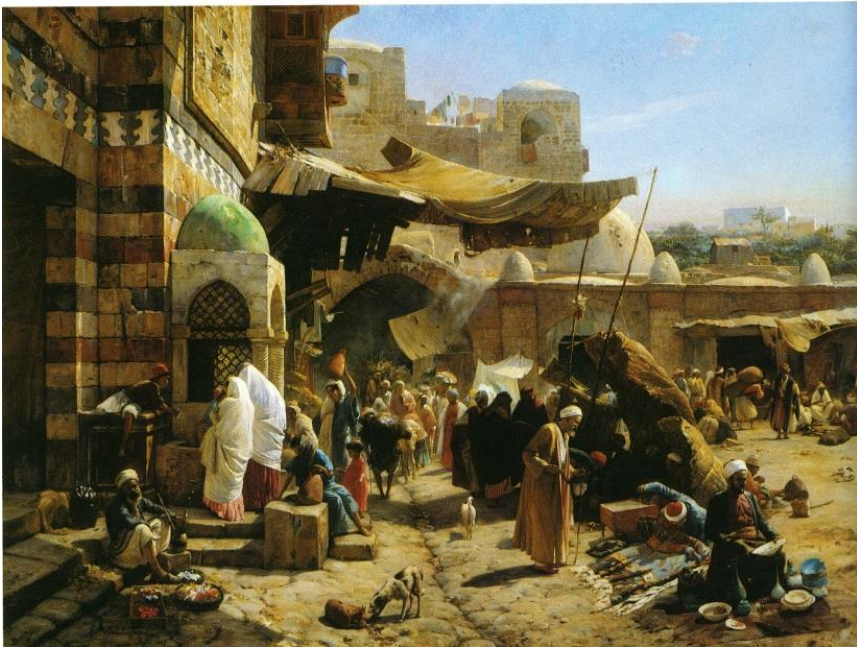
一方、オリエントは西欧からみた東方世界（中東・アジア）を指す。

そして 19 世紀から 20 世紀にかけて、西欧に対して中東・アジアが劣勢になり植民地・半植民地として西欧列強の支配を受けるようになると、西欧人はオリエントに対して特定の見方を持ち、イメージをもつようになる。これは偏見にもとづく差別的なものであり、これをオリエンタリズムという。

具体的には、オリエントの人たちは、肉体的に劣り、知的でなく怠惰である。またオリエントの社会に対しては、文化的に遅れ、発展のない停滞的な社会であり、近代社会になじまない、というものであった。

また、現代のように情報がない時代であったことから、西欧人はオリエントに対して偏見をもっていた一方で、かれらのイメージには異国情緒やロマン的要素があった。

こうしたオリエンタリズムは 19 世紀に西欧の画家が描いた絵画にもあらわれている。描かれた女性は官能的であり、また背景としての社会は退廃的な雰囲気をもつ。



こうしたオリエントに対する見方は、西欧人に刷り込まれ、人の心理に浸透し強められてきた。そして西欧人がオリエント地域を支配する上での心理面での合理化に役立った。オリエント社会を植民地支配することは、オリエント・アジアを文明化し近代化することだ、というようにである。

実際に、西欧人のオリエン特に対するこのオリエンタリズムの見方は、優れた西欧人がオリエン特・アジアの目をさまさせ近代化をさせてやるという、植民地支配を合理化するうえでの心理面での役割をもち、この偏見が支配を正当とする根拠になった。

オリエンタリズム的な見方は今日も残っている。ハリウッド映画でのアジア人の描き方に不愉快な思いをすることがあるのも、映画製作者の意識・無意識での偏見、つまりオリエンタリズムによるところが大きい。

一方、アジアの側の問題は、偏見に対してこれを無批判に受け入れ、西欧また西欧人へのコンプレックス、またこの裏返しである憧れの形をとる傾向がみられることであろう。